〈ポジションとマヌーヴァ〉、「実践の転倒」と成人教育をめぐって

～グラムシ「サバルタン」論のポストコロニアル多文化主義批評による再訪ノート～

吉　田　正　純

Position and Maneuvers, On "Rovesciamento della praxis" as Adult Education

— Revisiting Gramsci's Subaltern Studies through "Postcolonial-Multicultural Critique" —

Masazumi YOSHIDA

I　グラムシと多文化主義／教育の間に、〈危機〉の「歴史ブロック」

"They hart you at home and they hit you at school／they hate you if you're clever and they despite a fool. . ." (John Lennon "Working class hero")

1　〈ポジションとマヌーヴァ〉、「アイデンティティの政治」と「プラチックの哲学」

本稿ではグラムシ『獄中ノート』("Quaderni del carcere"、以下Q）特に後半の「実践の哲学」をめぐるテクストを、その諸概念の配置換えを通じてポストコロニアルのアイデンティティ研究へ翻訳する可能性を探る。ここでは「ノート」という形式の単に分析的／説明的であるよりは解釈的／定立的な「問い」の設定に拘りながら、（成人）教育研究における〈転換〉の「実践＝プラチック」を考察する大まかな航路図を素描する[1]。そのためまずその「陣地戦」war of positions を読みかえ、リニアな進化主義の「陣取り」的な時間軸進行が対位法的に「他者」に直面して撞着する「文化のトポグラフィー」（サイード）として再布陣する。さらにポストコロニアルの機制で「帝国」の内なる「文化戦争」たる多文化主義論争で右派が秩序攪乱の源とするグラムシの〈亡霊〉を増幅し、全体化・統合よりは差異の政治——「ポジションの戦い」としての多文化主義／教育に接近させる[2]。他方で「全面戦争」的な占拠・破壊の比喩が警察／管理社会の「城塞」に際して膠着する戦局を打開する「機動戦」war of maneuvers を組み直し、「対抗ヘゲモニー獲得」とは異なる場所的な「介入の戦術」（チョウ）に変形する。それはリベラル多元主義の「個の多様性」への解消に抗して固有の歴史的凝集力を有する「アイデンティティの政治」を、本源ではなく局所的な素材を糾合して連結し抵抗する政治の技術——「マヌーヴァの戦い」として活性化する[3]。発話の位置＝ポジションを不問にしたマヌー

ヴァ操作は権謀術数に堕するが、政治の技術たるマヌーヴァの創発抜きのポジション獲得はサバルタンの語りの再領有化に過ぎない。

それを基盤に「実践の哲学」における「フォイエルバッハ・テーゼ」の「教育者の教育」としての「実践の転倒」の試みを成人教育研究に移し変え、一元的「主体形成」の形而上学から複合的「変革」の契機を抉り出す。グラムシの「歴史の周辺」の考察からサバルタン研究に至る道筋を、従来の「ヘゲモニー／知識人／市民社会」の安定したトリアーデとは別なコンテクストに移し換える「読み」の脱構築のための準備として、次の予備作業を提起したい[4]。まず（前半では）歴史の〈解釈〉をめぐって「ナショナル／エリート史」が周縁化し沈黙させる「マイノリティ」の語りが埋め込まれた記述を喚起し、むしろ他者性の抑圧から「社会的な力関係全体のうねり」を読み取る。それは（「言説的節合」の理論も含め）すべてを単数の「ヘゲモニー」に還元する「市民主義」へのトランスフォームを括弧に入れることで、多文化主義／教育における「マイノリティ」のエスノグラフィと歴史を記述する場所を開く[5]。次に（後半では）「危機」における社会の〈変革〉に関わって自律的／能動的な「主体」の想定の困難に直面しつつ、「反人間主義」が無限の後退と「中心」への批判を無効化する限界も考察する。そこから「ヘゲモニーなき支配」と「ヘゲモニーの危機」が縦断的に内部に織り込まれたポストコロニアルの批判へのメタモルフォーゼを経て、「サバルタン」論を「マイノリティ教育」研究に変換するマヌーヴァを探りたい[6]。

2　「歴史ブロック」と文化の政治、「ペシミズム」とヘゲモニーの脱本質化

グラムシの「歴史ブロック」は「プロレタリアート」アイデンティティの危機をめぐる分析において、「構造」への還元を代表する（カウツキー的）広義の「経済主義」だけでなく、ヘーゲル主義的「主体」を召喚する（ルカーチ的）「西欧マルクス主義」とも隔絶する空間を占める。その「土台／上部構造」から諸実践の「客観的／主観的」要素等々への拡散は、Q10であらゆる宿命論的な「隠れた神－構造」と切断する試みの中で、「実践の哲学」と「実践の反転」に焦点化する[7]。この着想の源であるソレルはこの二元論を単線的な進歩や「相互作用」に帰するどころか、「政治－実践」をあらゆる本質主義的な構造への還元から切断し、イマージュの喚起による「飛躍」によって一塊の「ブロックとして」統合する革命（ゼネスト）の「神話」に賭けた。「経済主義」や人間的「進化」の楽観とは対照的な抑圧の現実への徹底した「ペシミズム」は、逆説的にいかなるアイデンティティも必然化しない（ファシズムにさえ流用しうる）多元的な「社会集団」の政治と「文化」の闘いの空間を開示する[8]。ここでの「歴史ブロック」はその「自由（恣意－生の飛躍）の背後には最大の決定論」との緊張関係を保ちつつ集団意志の「能動的で建設的な局面」（現代の君主）へと変形されるが、もはやそれは「別の」超越論的な本質に回帰するものではありえない。それは「土台／上部構造」を含む「社会構造－行為者」の比喩的アンチノミーを流動化し、二者の「相互関係」や優位性どころかカテゴリー自体を変質させ、「ブロック」を一枚に塗りこめる「セメント」としてのヘゲモニーを可変的な継ぎ目に組み替える潜在性を有する[9]。

こうして「歴史ブロック」の概念は構造－機能主義的な単線的進化の径路を不確定化するば

かりでなく、特異的な凝集力と強度を持つ脱本質化されたアイデンティティを節合する「実践の哲学」への橋頭堡を築く。さらにベルクソン的な「生の飛躍」まで補助線を引けばそれは単に静的な多元性の肯定ではなく、潜在的な〈記憶〉の多様性を現実化する「差異化の運動」としての多文化主義／教育の原理に接続しうる[10]。これは単なる「上部構造」における政治－文化の自律性への退却ではなく、逆に危機に際した社会－経済〈構造〉レベルの「有機的危機」の亀裂を深く刻むことで、散在する記憶とたたかいを構造化しつつ諸実践を産出する意味で物語的な「歴史的」ブロックをなす。Q11の論述で「従属的諸階級」の「集合意志」に置換される「階級意識」を担保するのは、純政治的指導から（ルナンよりソレルに近しい）「知的道徳的」イニシアティヴに向けられる点で「文化の政治」を準備する[11]。その帰結として「人民大学」を大衆の「文化と世界観の高度な形態に自己を高めようとする真摯な情熱と高い意思」を評価する一方で、「大衆がその実践的活動で提起した諸々の原理や問題を彫琢」する作業を再考させる。この「学校教育的な諸関係に限定されない」教育的関係は、決定論的な当為の一方的伝達とも「評議会」への楽観とも異なる「歴史ブロック」が、「知識人／民衆」の「知ること／感じること」を結合する「指導されるものと指導者との個体的諸要素の交換」としての「実践の哲学」に向かうことを予期させる[12]。

II　「市民主義」的ヘゲモニーから／のトランスフォーム、啓蒙 ── 人間主義の臨界点

3　「エラボレーション」と表象の政治、「現代の君主」とヘゲモニーの複数化

「エラボレーション」の概念にもまた〈常識－良識－哲学〉と上向する世界観の「等質化」と相克する、「文化」の多様性を「従属化、分裂化、拡散作用、再生産」の局面（サイード）を経て「思想」に「仕上げる」e-laborare モメントを読み取れる。それは「文化」を画一化や還元が不可能な輻輳する政治的－歴史的現実と把握する「分析的多元論」（同）として、均質化作用だけでなく分散した配置によって「力」を産出する契機を浮き彫りにする[13]。Q12の「知識人」解釈は二元的な「階級対立」のみに収斂しないこの複数のポジション ── 敵対性の交錯を前提として、独立した「知的活動」自体ではなく教育・メディアや「党」を含む「装置」内部での「関数」function（「文化史と政治学史」の）が意味を持つ。その「有機性」は単線的移行（伝統的……）の調和した定数ではなく、アプリオリな統合よりは「従属的諸集団」の寸断された「常識」の生態的複合性と結びつき、「運動」が思想・「世界観」として代弁＝表象する意味と「限界」を刻印する[14]。だからこそ「支配」の交差する結び目として直接間接の「媒介」的な位置取りである「知識人」関数は、みずから「統治」する「能力と技術的＝政治的知識」を練り上げ局所的－種差的に思考し語る活動的な「アマチュア」に結像する。その担保は「我々」の表象の部分性と困難を縫合する「『恒常的な説得者』として、実践活動に積極的に混じりこむ」建設者－組織者としての「新しい型の知識人の創造」を担う、「知的活動を批判的に仕上げる」作業としての自己教育である[15]。

この「知識人」の読みかえは「現代の君主」を被抑圧者が単一に代表される諸人格としての「党」や「教育者」に縮減するのではなく、「有機的危機」において「ちりぢりに散らばった」民衆意識をめぐる「表象の政治」に拡張しうる。逆にこの「教育的」組織としての「党」は、

形而上学的な「主体形成」を担う偏狭な前衛主義だけでなく、「自発性」を賛美して「知識人」機能を敵視するポピュリスト的な「カリスマ」崇拝への防護壁でもある[16]。その位置はソレルの「集合意思」における「神話の必要性と神話批判の必要」の二重の具現化として、「知識人」によるサバルタンの政治的代表だけでない表象作用の限界と「限定された任務」（スピヴァック）に関わる。Q13におけるマキャベリの「君主」は確固たる単一性どころか「複数になること」や「分裂する力」（アルチュセール）を意味し、本質・起源に還元されない孤独な「あらゆる根から切れている自己」（同）による「連帯の政治」の空間である。それは「粉砕され分散した人民」の自己組織化の欲望と「多数性を横断しながら、その横断のなかで姿を現わし、分散と分解と危機を起点にして定義される力」（ネグリ）の構成的権力へのイメージを「一から独創」する場である[17]。そこでのマキャベリ的な「積極的な政治教育」は暴君への憎悪よりは「政治の理論と技術」を獲得するよう「知らないでいる」人々に語りかけ、分析よりは「暴露」を・教訓よりは「行動にのり出す」人々の「『宣言』の文体」を要する。そこでの複合的な「エラボレーション」の教育的作業は、抽象的「人間本性」ではなく「無限に多くの痕跡を各人のうちに残し」た歴史的的所産としての「自己」を「実践」において分節化／節合しながら、同時に「他者」に直面してそれを脱分節化／中断する「アイデンティティの倫理」（竹村）に根ざす多文化主義的遭遇の実践となる[18]。

4　「コンフォーミズム」と連帯の政治、「受動的革命」とヘゲモニーの境界化

こうした文脈で「コンフォーミズム」も順応／適応のネガティヴな一方向性だけでなく、複数性を前提にアイデンティティへと同一化／形成 con-forme する過程を、「支配」と抵抗のミクロポリティックスとして微分するツールとなる。それは「教育者」国家による全能的再生産よりは「飽和」し「自己の一部を異化」する危機における、拮抗する複数のポジションからの「順応化」の闘ぎあう（その意味で「陣地戦」的な）プラチック＝「慣習・思考様式・行動様式、道徳」を主題化する[19]。これと呼応したQ14・15での「受動的革命」分析は国家を単純な二つの「対抗ヘゲモニー」の角逐の反映ではなく、「進歩主義」の全体化とは切断した多様なコンフォーミズムの「様々な組合せ」の舞台へと転換する。それは「宿命論的」に「政治」領域を文化へ（それゆえ国家を「市民社会」へ）自動的に解消する単なる「綱領」ではなく、むしろ「下からの」自発性が連鎖する差異の複合性を読み取り、「近代化論」的発想とは対極的な対立の増殖を志向する[20]。そのための「コンフォーミズム」は「国家」による一元的な順応化（とりわけファシズム）とは異質で非対称な、不可避に「諸個人間の軋轢を経」て（「解体と騒乱の様相をもたらす」としても）「諸個人の参加」を命題とする教育的な組織を考察可能にする。その「新しいコンフォーミズム」は「民衆文化の腐植土」に根を張りながら形式的な「自発性・独創性・個性」とは対照的な「文化の闘争の帰結」である限りで、純粋な観念的「主体」の抵抗ではなく現実の受動性の徹底した認識を通じて「自由」に至る「社会性」の教育と結びつく[21]。それはマイノリティが自身のアイデンティティ境界の自明性を留保することで、横断的な抑圧の複合性を「連帯の政治」の糸口に転化することで複数の「ヘゲモニー」を境界化する試みである。

それゆえ「社会性」を実現する学校以外の新聞雑誌・民衆大学など「知的諸事業」への民主主義／ヘゲモニーとしてのイニシアティヴとともに、「知育と公共文化」のための劇場・図書館・博物館等の（「独学」とは異なる）「自己教育のための文化装置」の組織化が課題となる。このQ16の「文化」論における「知的道徳的改革」は、ルナンーデ・サンクティスの「政治教育者としての国民国家」を超出して、「文化闘争」における排他的・「警察的ではない」別の「国民」を構想する潜在性をもつ[22]。それはクローチェ（またファシスト）の単一性にむけた「一定の文化の洗練」よりは「生について互いに敵対的な関係にある思想の対立の時期」にある、複数の「文化の生存権」をめぐるのアイデンティティ・ポリティックスの場である。その「国民的」は単なる「被抑圧者」の置き換えでも「国民の魂」に固執する「ナショナリスト」でもなく、「複数の帰属の問題、国民や民族概念の両義性」（伊藤）に関わる考察に「拡大解釈」しうる[23]。同時にそれは「国家」を社会運動と〈市民社会〉の「外部」に配置してカタストロフ的に「乗り越え」可能な実体とするのではなく、「歴史的自律性を欠く」従属的諸集団の「垂直的・水平的」解体状況を出発点とせざるをえない。逆にそこに抵抗と変革のための成人教育研究が「本性」natura を超越的客観性ではなく社会的諸関係 ── 「諸基準点がまったく異質な」ポジションからの「毛細管的」主張に立脚して、境界を越えた多文化主義的な「国民国家」批判へと向かう小道がある[24]。

Ⅲ　ポストコロニアルへ／のメタモルフォーゼ、国民 ── 全体化作用の裂開

「でも、大したことはしないのさ、でも歴史は無名の、さまざまな、ささやかな仕草から成り立っている……」（イタロ・カルヴィーノ『くもの巣の小道』）

5　「国民－民衆的」文化と国民国家の臨界、言語問題とヘゲモニーの「外部」

グラムシの「国民－民衆的 nazionale-poplare」の繋辞には前者へと収斂する強い「国民人間主義」（鵜飼）の欲求と拮抗して、統合しえない「民衆的」な「要求、強い熱望、広がった感性」が横溢する裂け目も読み取りうる。それはQ19・21の「国民的」歴史・文学の考察における（「南部問題」メモに比べ）「サルディーニア」への抑制または「忘却」の狭間に、「国民国家」（の不在・頓挫）への両義的態度として観察される[25]。まさしくこの分裂と不在に簇生したイタリア・ファシズムへの対抗は、「南部知識人」を含め鎮圧軍・「警察領域」に繰り込まれる「南」と、危機の統合策としての（北アフリカ）「植民地主義」・侵略戦争の煽動と動員との痛苦な格闘抜きには語りえない。それゆえ対質としての「ジャコバン主義」は平時の「南北関係」や「同盟」とは異なり、ファシスト「国民化」の構成に不可欠な排外主義と人種主義のコロニアルな配置に抗する固有の結合と闘い ── マヌーヴァを召喚する[26]。その課題は（ホールらのサッチャリズム批判が示すように）ポストコロニアルの権力布置で転倒した「ポピュリストーナショナリスト」的な言説編成が繰り返し「内なる敵」を選別し「国民」を配備する布陣で再演される。それは一元的な「国民文化」の強調のみならず「多文化主義」言説を周辺に加工し再配置するヘゲモニーの複数化を不可避に伴うがゆえに、（抽象的「永続革命」同様）脱「国民化」の一撃で足る構築物ではない[27]。

だが今一つ「民族的－民衆的」の含意は「民衆的」の軋みが一度ならず「文化」および教育に響き、包含が「全円化」たりえず「ヘゲモニーなき支配」としての「外部」を産出し、「国民主体」形成自体に亀裂を残すことにある。そこから多文化教育研究はQ29における「規範／生活言語」・「統一／地方言語」の考察に顕在化する「ナショナル・アイデンティティ」とエスノグラフィックな「民衆文化」との交渉局面を再訪しうる[28]。さらにその「南の視点」（姜玉楚）と呼応する普遍的近代化や「従属論」とは異なる各社会の種差的課題として、純粋無垢な植民地的「民族主体」と「帝国」的国家の二項対立のみに還元不可能な複合的ヘゲモニーの領域が開示される。そこでは「民族言語」のように発話ポジションに「国民化」との関係、すなわちその規範的一元化への多言語的な異化作用－抵抗としての「民族」の情況的運用が拮抗するアリーナとしての「国民国家」を焦点づける[29]。ルナンの「気ままであり予見できない事件」としての主意主義的国民国家に深く共鳴する「統一言語」論は逆説的に、その限界と「普及の無益さ」ゆえに「生活言語」に刻まれたマイノリティの「記憶」を喚起させる。「下からの言語革新の広がり」は「帰国移民、旅行者」等々によるディアスポラ化の過程であるがゆえに、「文化的ヘゲモニーを再編」する過程としての「統一言語」は予測しえない・選択的な「政治的行為」である。その学校・メディアを含む公共空間に介入する「規範言語と生活言語が力動的に競めぎあっている現実の毛細管過程」としての多文化教育構想は「民衆的」の痕跡と断片の想起が欠かせない[30]。

6　「アメリカニズム」と規律化の錯綜、「大衆文化」とヘゲモニーの重複化

だがルナン的な「国民人間主義」の枠内での「民衆文化」の本源化は人種主義や植民地主義を排除しないうえに、そのノスタルジックな想起に留まるならば新たな「大衆文化」の台頭局面での過去への退却に帰着する。そこで「アメリカニズム」を論じたQ22は「市民社会」の社会生活を根幹から揺さぶる「大衆文化」の生成に対して（「未来派」的な）全面賛美でも高踏的な憂慮でもなく、その規律化のメカニズムの解明と抵抗の可能性を探る契機となる[31]。それは今日の「グローバリゼーション」批判との関わりでは消費や支配様式の「画一化」自体よりは、むしろ各社会で新たな「伝統」の発見や「旧い諸階層の破片」を糾合しながら〈個人〉の生に働きかける抑圧の個別化と密接に関わる。「清教徒的」な価値と人口学的な技術を結びつけたミクロな「生－政治」としての「家族・性秩序」の「上部構造型の諸問題」形成や、黒人と移民労働者双方の「人種問題」のインパクトの考察は、端緒的にこの規律的権力編成の「大衆的」受容・翻訳に向けられる[32]。そうした変化は「日常」レベルでの分子的な「個の身体」への「強制（自己規律）と説得とを調合」するテクノロジーを（生産点も含め）個別的に開花させるため、「新しい秩序」は空白から防御的には創りえない。そこに「民衆文化」への道徳的退却の誘惑を伴いつつも、フォード的な「労働への学習」（ウィリス）の組織化と規律化が工場と社会の双方で急速に進行する「押し付けと自己の苦悩」を基盤とした、創発的な成人教育の研究を招来する必然性がある[33]。

それは国家の次元とは別に拡大しながら新たな統禦のグリッドを配置する公共空間における、ファシストの大衆的「国民文化」創出の技術に抗する別様な「政治」の構想と深く関連する。

Q23・24の「大衆文化」・ジャーナリズムについての考察は「新しい芸術」としての文化や「総合的ジャーナリズム」を、そうした個人化された「日常的」生活・文化における微細な抵抗戦術――マヌーヴァの結節点として探る指向性をもつ[34]。それはカルチュラル・スタディーズの「グラムシへの転換」がかつて「発見」した、多元的・自発的なメディアやサブカルチャーにおける抵抗と支配の解剖とともに、そこでの人種主義やセクシズム批判との言説的節合の回路を開く。フーコー的な主体化と抵抗の豊饒と拡散を可能にするこの「転換」（の読解）はしかし、支配的な「ヘゲモニー」に抵抗をも読み込み全一化して「変革」の可能性を永久に遅延するある種の「凡庸さ」と隘路も準備した[35]。「総合的ジャーナリズム」や「文芸批評」の構想はこうした限界の突破の可能性として、運動としてのメディアの教育的側面を、（個別的雑誌・サークル運動とは異なり）批判的な意識性に結合する試みに踏み出す。だがこうした「民衆／大衆文化」における支配と抵抗の動態の詳細な考察の準備から、「コンフォーミズム」を媒介として「歴史ブロック」の形成に至る「反乱への回路」への失われた環は、最後の「サバルタン・ノート」に持ち越される[36]。

Ⅳ　「サバルタン研究」からのグラムシ再訪、「実践の転倒」と成人教育研究

7「歴史の周辺」とマイノリティの政治、「フォークロア」とサバルタンの表象

こうして「サバルタン」の位置は対抗的な「国民史」の本源化への批判から多元的な「抵抗主体」を節合する「知識人／現代の君主」の再定位、さらにその「政治的自律性」の閉域からミクロな「文化的抵抗」の分析へと移行する。やがて「日常性」への退却に逢着するこの行路は、いみじくもグラムシに鼓舞されたインド史の「サバルタン研究」とカルチュラル・スタディーズが1980年代前後に異なる形で辿った道を再演するものでもある[37]。それはQ25の「サバルタン・ノート」で提起される「民衆／大衆文化」の「歴史の周辺」における「断片的、挿話的」歴史の「自立的なイニシアティヴの痕跡」の「エラボレーション／コンフォーミズム」の必要性と困難に突き当たる。そこではナイーブな「知識人」の「代弁／表象」の全能な全体化への回帰でも「被抑圧者」の発話可能性の無条件な称揚でもなく、「理論」によるマイノリティの「周縁化／取り込み」の暴力への直面が問われる[38]。（成人）教育研究に引き付ければ「マイノリティ」の周辺化を伴う自発性や「物言わぬ身振り」（チョウ）への意味付与の拒否だけでなく、「本当に楽しそうに生き延びる」（チャクラバルティ）サバルタンとの「対話」に赴き出遭う直接性と共約不可能な「他者性」の糾合への根本的懐疑を不可避とする。だがそれは単なる「啓蒙主義的」教育学への反発や分離ではなく、むしろ「自律性の獲得」の過程での「反響」に応えるために、「教えられるべき他者」までも予め読み込むような機制自体を解体し「解きほぐす」手がかりを提供するとも考えうる[39]。

そうした立場からQ27「フォークロア」の考察は民衆の「伝承」－「語り」への「研究の心構え」、すなわち訪れ「聞く」ことで「真剣にとらえる」ための主体の位置取り・ポジションとプロセスの書き込みと読みうる。それは「民衆史」のような支配的ヘゲモニーとの「葛藤なき並存」の状態にある「民俗」的全体性を前提にするのではなく、「支配」の臨界点でそれを攪乱し異化する交換不可能な出来事に向き合う質を要請する[40]。そこにフォークロア――「常

識」を実体化された「文化」のみならず身体化された価値や「生きられた経験」からなるプラチックに拡張するとともに、「他者」を表象し関与するポジションを書き込む空間が開かれる。それはコロニアルなマイノリティの「周縁化」の暴力をリベラル多元主義の寛容で中和するのではなく、アイデンティティの政治において表明される「戦略」── マヌーヴァとしての文化・歴史の記述に挑む[41]。その意味での「フォークロア」の学習としての多文化主義／教育は、アイデンティティを構成する断片的な「絵画的」要素の収集に限定されず、「教育学」における「他者」性に応答するパフォーマティヴな実践として再考される。それは同時にアイデンティティ／「主体」への観念的な閉止を突破する破壊的な力、教育者／学習者の位置を揺るがす「転倒の実践」から「実践の転倒」への反目的論的な「実践の哲学」が思考される条件を準備する稀有な空間の模索でもある[42]。

8　「実践」の転倒、成人教育研究と「ポストコロニアル多文化教育」批評

かくしてサバルタンの抵抗と変革を求める実践のエージェントとして表象し記述する試行錯誤は、マルクス「フォイエルバッハ・テーゼ」の「実践」概念の読みかえを経て、変革のための成人教育研究に改めて逢着する。だがそれはアプリオリな単一の「変革主体」への回帰ではなく、敵対性が再配置される事後的・偶有的な「歴史ブロック」の構成のなかで、「他者」の到来に応える受動性を通して立ち現れる複数の「主体位置」の分節化である[43]。上村が指摘するように「実践の転倒」rovesciamento della praxis は単なる実践による変革と同義ではなく、「別のヘゲモニー創出」の転換点における「実践の反転作用」を、自己創出よりは不均質な「構造の諸矛盾の自覚」と結ぶ「不純な」プラチックの哲学に立脚する。それは第3テーゼの「教育者自らが教育される」実践の転倒を教育行為の二者間的「主客の逆転」とは異なる、「環境の変革」の実践に固有な学習実践が「他者」とのコラボレーションを通じたハイブリッド化としての「エラボレーション」に向かうプロセスたりうる[44]。だがスピヴァクが述べるように「政治的なヘゲモニーに状況的かつ不均等に割り込んでいくサバルタンの実践」と、「解釈された」＝「自己同一的なものを……『他なるものに── する』という終わりのない過程」としての理論との距離は小さくない。だからこそこの（第11テーゼの「解釈」と「変革」を改読した）齟齬に関わる教育理論の実践は、「知識人」の媒体が自らの本質化したポジションを「解きほぐし── 学び捨てる」unlearn ためのトランスフォームを通じ、「他者」に「答えを返すような仕方で、語りかけるように試みる」（Landry／Mclean）ことで関係性を切り結ぶ教育学的「コンフォーミズム」を要する[45]。

そのポストコロニアル多文化主義／教育批評の問題機制への「越境」を試みるならば、不統一で散在する歴史的記憶の想起と「語り」を国民－国家言説へ回収するのではなく、それとの交渉と変形の相から把握できる。サバルタンの「民衆的」文化自体が新旧のコロニアルな支配的統合化と両義的な関係を取り結ぶ以上、教育学（理論）による本源的文化への憧憬ではなくマイノリティの主体化── 関与 agency に開示する抵抗線の模索が課題となる[46]。それは今日の「アメリカニズム」── グローバリゼーションが多文化主義とポストコロニアル理論そのものを含めてサバルタンの「語り」と身体をも収奪・消費する権力の網の目を精緻化する中での

固有の困難を伴う。であるからこそ多文化主義／教育研究は個の自律性や抵抗・参加の賞賛を「表象－代弁」の批判に代替させるのではなしに、「教育学」自体のコロニアルな言説編成に不可避に刻まれた「他者性」（の抑圧）の痕跡を解きほぐす作業を要する。私たちが「グラムシに倣って」進みうる可能性は、「新しい文明」-cililtaの「夢」が学校的教育や政治的解放のみによって一挙に到来するのではなく、この不断の予測不可能なマイノリティの抵抗の渦中から「実践の転倒」の破片を拾い集める営為にある。マイノリティの自己解放運動たろうと希求するこの多文化主義／教育の研究は、たとえそれがサバルタンの分断され懐柔される日々の失敗と敗北の記録であろうと、「『永続的な』勝利」を信じてその「未来の問い」に応える責任と希望を保持しうる。ベンヤミンの言う「非常事態」が被抑圧者には恒常的であり「ファシズム」が過去や未来の課題でない限り、教育研究のポジションを審問し抵抗のマヌーヴァを模索する旅はまだ終わらない[47]。

註

1．本ノートは拙稿（2001）修士論文「異文化学習と他者表象の政治学」の背景議論の補足であるとともに、後続の事例研究に向けた予備作業である。なお用語・概念等は修士論文（URL http://web.kyoto-inet.or.jp/people/aasja/archives/archives.htm）も参照。

2．Q13§24（D. フォーガチ編（1995）『グラムシ・リーダー』（以下GRと略））pp. 271-273、E. サイード（1998）『文化と帝国主義Ⅰ』（みすず書房）pp. 111-116、D. Coben（1997）'Revisiting Gramsci', "Studies in the Education of Adults" 27-1, p. 36-37参照。

3．レイ・チョウ（1998）『ディアスポラの知識人』（青土社）pp. 32-35、M. ド・セルトー（1987）『日常的実践のポイエティーク』（国文社）pp. 24-28、グラムシ歿後60周年記念国際シンポジウム（以下シンポ）編（2000）『グラムシは世界でどう読まれているか』（社会評論社）所収 J. ブッティジージ「北アメリカにおけるグラムシ」pp. 58 62参照。

4．上村忠男（1997）「唯物論と『反転する実践』」（『批評空間』Ⅱ－15）、U. Aptitzsch（1991）'Gramsci and Current Debate on Multicultural Education'（"Studies in the Education of Adults" 25-2), C. E. Sleeter/ P. L. McLaren "Multicultural Education, Critical Pedagogy, and the Politics of Difference"（SUNY Press）p. 37。

5．Q13§17（GR p. 241)、崎山政毅『サバルタンと歴史』（青土社）pp. 20-32、R. グハ他編（1998）『サバルタンの歴史』（岩波書店）pp. 11-19、片桐薫（2000）「グラムシのサバルタン概念と今日のサバルタン問題」（『アソシエ』3）参照。なお下線はグラムシからの引用（以下同)。

6．G. C. スピヴァク（1998）『サバルタンは語ることができるか』（みすず書房）pp. 3-29、上村他（1998）「スピヴァクあるいは発話の場のポリティクス」（『現代思想』vol. 27-8）pp. 49-57。

7．Q10§41（GR pp. 222-226)・13§18（GR pp. 245-246)、松田博編（1988）『グラムシを読む――現代社会像への接近』（法律文化社）所収石倉康次 pp. 119-126、N. プーランツァス（1983）『ファシズムと独裁』pp. 199-201参照。

8．G. ソレル（1933）『暴力論（上)』（岩波文庫）p. 33・p. 49、T. イーグルトン（1999）『イデオロギーとは何か』（平凡社ライブラリー）p. 389、またE. ラクラウ／C. ムフ（1992）『ポスト・マルクス主義と政治――根源的民主主義のために』（大村書店）p. 67も参照。

9．Q13§1（GR p. 289)、L. アルチュセール（1999）『哲学・政治著作集Ⅰ』（藤原書店）p 482、Ch. ビュシ＝グリュックスマン（1983）『グラムシと国家』（合同出版）p. 389参照。

10．ビュシ＝グリュックスマン前掲（1983）pp. 158-161、G. ドゥルーズ（1974）『ベルクソンの哲学』（法政大学出版局）pp. 104-109、同（1992）『差異について』（青土社）pp. 80-84参照。

11．Q11§13（p. 427)、ラクラウ／ムフ前掲（1992）p. 108、L. アルチュセール（1994）『アルチュセー

ルの〈イデオロギー〉論』（三交社）p. 185、G. ターナー（1999）『カルチュラルスタディーズ入門――理論と英国での発展』（作品社）p. 89。

12. Q11§12（GR p. 416•435）、10§33（M. マナコルダ（1996）『グラムシにおける教育原理――アメリカニズムと順応主義』（楽）pp. 330-331）、マナコルダ同（1996）pp. 195-196、竹村英輔（1987）「グラムシにおける教育・人間・社会」（『日本福祉大学研究紀要』74-3）p. 40。

13. E. サイード（1995）『世界・テキスト・批評家』（法政大学出版局）p. 281、また R. グハ他（1998）『サバルタンの歴史――インド史の脱構築』（岩波書店）p. 293・スピヴァック「サバルタン研究」、A. グラムシ（1999）『現代の君主』p. 170・上村「グラムシを開く」参照。

14. Q12§1（GR p. 380）、松田博（1996）「A. グラムシの『知識人論ノート』の再検討(1)」（『立命館大学産業社会論集』32-3）pp. 127-129、また E. サイード（1998）『知識人とは何か』（平凡社ライブラリー）p. 28参照。

15. Q12§3（GR400-401）、12§2（GR p. 397）、マナコルダ前掲（1996）特に p. 314・p. 327、また「アマチュアリズム」について（流用として）サイード前掲（1998）pp. 136-137参照。

16. Q13§17（GR232-236）、13§23（GR251-252）、石堂清倫他編（1989）『生きているグラムシ』（社会評(16)論社）所収 p. 179・粉川「グラムシを脱構築する」、また松田博（1997）前掲論文(2)pp. 146-7（同32-2）U. Aptzsch（1993）, 'Gramsi and Current Debate on Multicultural Education'（"Studies in the Education of Adults" 25-2）pp. 140-142参照。

17. Q13§1（GR pp. 287-289）、L. アルチュセール（2000）「マキャヴェリの孤独」（『環』vol. 3）pp. 232 247、T. ネグリ（1999）『構成的権力――近代のオルタナティブ』（松籟社）p. 434、G. C. スピヴァク前掲（1998）pp. 115-116参照。

18. Q13§20（『現代の君主』pp. 102-105）、13-7（GR p. 279）、上野俊哉（1999）『ディアスポラの思考』（筑摩書房）pp. 53-56、竹村和子（2000）「アイデンティティの倫理」（『思想』第913号）p. 51、アルチュセール前掲（1999）p. 245参照。

19. Q8§2、13§7（p. 279）、松田博（1997）「グラムシ『獄中ノート』における『順応主義』概念の生成」pp. 7-8（『立命館大学産業社会論集』33-2）参照。

20. Q15§58（GR p. 504）、15§62（同 p. 3 23）、またリン・チュン（1999）『イギリスのニューレフト』（彩流社）p. 203（特に P. アンダーソンの議論）、G. ヴァッカ（1995）「グラムシと今日の時代」（『思想』第851号）p. 136参照。

21. Q15§13（p. 294）、14§61（p. 508）、14§27・14§34（マナコルダ前掲（1996）pp. 340-341）、また松田編前掲（1988）pp. 59-61、松田博「現代社会像への示唆」参照。

22. Q16§9、11§4（上村編（2000）『国民革命幻想――デ・サンクティスからグラムシへ』（未來社）所収グラムシ p. 108）、ビュシ＝グリュックスマン前掲（1983）pp. 75 78参照、アルチュセール（1993）p. 37-40、石堂他編前掲（1989）小倉利丸「グラムシの現在性」p. 187。

23. Q16§21（GR470-471）、伊藤公雄（1998）「グラムシと近代国民国家」（情況出版編集部編『ナショナリズムを読む』pp. 42-45）、上村前掲 pp. 155 157。

24. Q16§12（竹村英輔前掲（1986））、N. プーランツァス（1983）『資本の国家』（ユニテ）pp. 179-183、H. A. Giroux（1992）"Border Crossing"（Routledge & Kegan Paul）pp. 182-186。

25. Q21§5（pp. 458-460）、E. ルナン他（1997）『国民とは何か』（インスクリプト）所収鵜飼哲、上村編訳前掲（2000）上村忠男「国民革命幻想」pp. 157-161、伊藤公雄前掲（1998）pp. 39-41。

26. Q19§24（GR pp. 316-317）、19§26（『知識人と権力』pp. 93-95）、いいだもも（1991）『アプレ・フォーディズムの時代とグラムシ』（御茶の水書房）pp. 378-381、前掲「シンポジウム」編（2000）所収 M. ズバラグリ p. 195参照。

27. 酒井隆史（1998）「内なる敵」（『現代思想』vol. 26-4）pp. 191-201、松田他編（1995）『グラムシ思想のポリフォニー』（法律文化社）所収中村正 p. 167、S. ボール編（1999）『フーコーと教育――〈知＝権力〉の解読』（勁草書房）J. ナイト他「ヘゲモニーの脱構築」pp. 189-196。

28. Q29-2（GR pp. 439-441）、S. J. ホール他（2001）『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』

（大村書店）所収 H. K. バーバ「文化の中間者」pp. 102 107、崎山政毅（2001）『サバルタンと歴史』（青土社）pp. 66-67、S. ホール（1998）「ニュー・エスニシティズ」（『現代思想』vol. 26-4）pp. 83-86。

29. 前掲「シンポジウム」編前掲（2000）姜玉楚「韓国におけるグラムシ研究の動向と課題」p. 84-85、Apitzsch 前掲（1993）pp. 138-140（特に「移民」と文化の考察）、石堂他編前掲（1989）p. 203、柴山健太郎「第三世界とグラムシの理論」参照。

30. Q29§3（GR pp. 443）・29§58（GR p. 440-442）、マナコルダ前掲（1996）p. 355-358、小森陽一他編（1998）『ナショナル・ヒストリーを超えて』（東京大学出版会）所収鵜飼哲「ルナンの忘却あるいは〈ナショナル〉と〈ヒストリー〉の間」pp. 263-265、鵜飼（1997）pp. 212-216、松田編前掲（1995）鈴木修「言語病理問題」pp. 222-226参照。

31. Q22§2（GR pp. 345 347）、鮫島京一（1998）「現代社会における『アメリカニズム』批判をめざして」（『立命館産業社会論集』33-4）p. 105・p. 114、マナコルダ前掲（1996）pp. 172-173。

32. Q22§3（GR pp. 348-350）、22§10（GR p. 357）、松田編前掲（1988）中村正「地平としての文化」p. 197、石堂他編前掲（1989）伊田久美子「グラムシ思想と女性解放の問題」p. 287、D. Coben（1998）"Radical Heroes"（Gerland Publishing）pp. 45-47（特に Holub の批判）参照。

33. Q22§11（GR pp. 358-360）、12§5（マナコルダ（1996）pp. 352-363）、22§13（『現代の君主』p. 302）、P. ウィリス（1996）『ハマータウンの野郎ども』（ちくま学芸文庫）pp. 402-406、P. Mayo（1999）"Gramsci, Freire and Adult Education" pp. 49-52参照。

34. Q23§6（GR p. 501）・24§1（GR p. 484）、石堂他編前掲（1989）小倉利丸「グラムシの現在性」p. 188、松田編前掲（1988）所収松尾博文「ジャーナリスト・ジャーナリズム論」pp. 282-289。

35. Q24§3（GR p. 490）、伊藤成彦他編（1988）『グラムシと現代』（御茶の水書房）所収フォーガチ「グラムシとイギリスの左翼」pp. 67-70、ターナー前掲（1998）p. 282-285、石堂他前掲（1998）伊藤公雄「『支配』の文化・歴史社会学に向けて」。

36. Q24§マナコルダ前掲（1996）p. 162、グハ他前掲（1998）スピヴァック pp. 299-300。

37. Q25§1（上村忠男編（2000）『知識人と権力』pp. 117-118）、崎山前掲（2001）pp. 32-42・pp. 54-73、上村忠男（1999）「戦略としての歴史記述」（『思想』第900号）pp. 62-71、栗屋利枝（1999）「『サバルタン・スタディーズ』の軌跡とスピヴァクの〈介入〉」pp. 214-218参照。

38. Q25§2（同上 pp. 110-111）、スピヴァク（1998）pp. 32-62、D. チャクラバルティ（1998）「マイノリティの歴史、サバルタンの過去」（『思想』891）p. 46、グハ他前掲（1998）グハ pp. 14-21。

39. Q25§3（同上 pp. 113-114）、D. チャクラバルティ（1996）「急進的歴史と啓蒙的合理主義」（『思想』859）pp. 99-102、太田好信（2001）『民族誌的近代への介入』（人文書院）pp. 114-122、L. ロウ（1996）「アジア系アメリカ」（『思想』859）pp. 228-230、A. マクロビー（1998）「フェミニズム、ポストモダニズムと『本当の私』」（『現代思想』26-4）p. 136、上村前掲（1999）pp. 75-77、Apitzsch 前掲（1993）pp. 140-142参照。

40. Q27§1（GR p. 449）、安丸／フジタニ（1999）（対談）「いま、民衆史を語る視点とは？ ── 民衆史とサバルタン研究をつなぐもの」（『世界』663）pp. 295-297、ホール他前掲（2001）所収 L. グロスバーグ「アイデンティティとカルチュラル・スタディーズ」pp. 158-159・p. 170。

41. Q27§1（GR p. 448）、S. ホール（1998）「イデオロギーという問題」（『現代思想』26-4）p. 63、・同「『新時代』の意味」（同号）p. 69、鮫島京一（1997）「ブリティッシュ・カルチュラル・スタディズの射程（中）」（『立命館産業社会論集』33-2）、伊藤公雄前掲（1989）p. 355-357。

42. Q27§1（GR p. 447）、マナコルダ前掲（1996）p. 168、崎山前掲（2001）pp. 80-84、H. K. バーバ（1995）「ポストコロニアルとポストモダン」（『現代思想』23-3）p. 267

43. 成人（社会）教育の先行研究との比較では黒沢惟昭（1991）『グラムシと現代日本の教育』（社会評論社）、鈴木敏正（1999）『エンパワーメントの教育学 ── ユネスコとグラムシとポスト・ポストモダン』（北樹出版）、小林繁（1991）「A. グラムシのヘゲモニー論と知識人論」（社会教育基礎理論研究会編『叢書生涯学習Ⅷ　学習・教育の認識論』（雄松堂出版）も参照。

44. Q10§41（GR p. 222・225）、上村忠男（1997）「唯物論と『反転する実践』」（『批評空間』Ⅱ－15）、

黒沢前掲（1991）pp. 124-128参照。

45. グハ他前掲（1998）スピヴァック pp. 312-313、スピヴァク前掲（1998）pp. 74-76、D. Landry/G. Mclean (1996) "The Spivak Reader" (Routledge) pp. 10-12、上村他前掲 pp. 61-64。

46. Q25§2（『知識人と権力』p. 111)、太田前掲（2001）pp. 207-226、崎山前掲（2001）pp. 80-83。

47. Apitzsch 前掲（1993）pp. 142-144、鵜飼（1997)『抵抗への招待』(みすず書房）pp. 252-255、ベンヤミン（1995)『ベンヤミン・コレクション』(ちくま学芸文庫）p. 652参照。